

「山の詩人」白居易〔一〕

—— 生誕から三十四歳まで ——

諸田龍美

元和五年（八一〇）三十九歳の白居易は、宮中画家の描いた自身の肖像画に、次のような詩を書き添えている。^①

我貌不自識、李放写我真

静観神与骨、合是山中人

蒲柳質易朽、麋鹿心難馴

何事赤墀上、五年為侍臣

況多剛狷性、難与世同塵

宜当早罷去、收取雲泉身

〔自題写真（0229）〕

この題画詩には「時に翰林学士たり」と自注がある。居易が翰林学士を授けられたのは元和二年十一月六日であり、翌年四月二十八日には、左拾遺も加えられた。^②

いま注目したいのは、迫真の肖像画をつくづくと眺めた居易が、自らの容貌について「合に是れ山中の人なるべし」と述べていることである。優れた肖像画は、対象人物の本質（本性）を表現する。この時、李放^③の描いた肖像画を見た居

易は、自身が本質的に「山中の人」であることを深く再認識し、早く官をやめ山中に帰るがよいと、自らに促しているのである。

また「遊悟真寺詩一百三十韻」⁽⁰²⁶⁴⁾の末尾近くでも、自分本来「山中の人」であったが、世に引き出され仕官を余儀なくされたと言う。

我、本、山、中、人、誤、為、時、網、牽

牽、率、使、読、書、推、挽、令、效、官

元和九年（八一四）八月、長安近郊、藍田県の悟真寺に遊んだ際の作品である。

さらに、同時期の「遊藍田山卜居」⁽⁰²⁵⁰⁾にも

脱置腰下組、擺落心中塵

行歌望山去、意似帰郷人

朝蹋玉峯下、暮尋藍水浜

擬求幽僻地、安置疎慵身

本性便山寺、応須旁悟真

と詠う。「疎慵（ものぐさ）」な自分は、「本性 山寺を便とする（山の寺に居ると心が安らぐ）」人間であり、ここ藍田山の悟真寺、近くの土地は、その条件を満たす故郷のごとき場所。ここに「幽僻の地」を見つけ山居を建てよう、と言うのである。

これら三首の詩から、居易には次のような自覚があったとわかる。「自分は本来、山中の人であり、山寺の近くこそ心安まる故郷のごとき場所。いずれは、その故郷（山寺の近く）へ帰るべきなのだ」という自覚である。

実際、元和十年（八一五）に江州へ左遷された居易は、廬山の遺愛寺、近くに草堂を構え、また洛陽退去後には龍門山の香山寺を深く愛して、最期はそこに葬られた。居易の人生は、「山から出て、再び山へ帰る旅」として捉えることができる。山は、白居易にとつて、本源的な出发点であり、心安らぐ故郷であった。その意味で、白居易を「山の詩人」と呼ぶことができるであろう。

本論の目的は、白居易が山とどのように関わり、いかにして山へ帰ったのか、その足跡を丹念に辿り、「山の詩人としての真相」を浮き彫りにすることにある。さらにそれが、人間の本質を考えるうえで我々に示唆するものは何か、究明してみたいと思う。考察は五回にわたる予定だが、本稿では、生誕から永貞元年、三十四歳までを対象とする。論述の方法は、先ず「伝記考」として、本論の視座から重要な事跡を各

時期について確認し、次に、当該時期における山（寺）との関わりについて考察したい。

一 伝記考①——生誕と31歳

居易は大暦七年（七七二）に鄭州新鄭県東郭の家に生まれた。徳宗の建中二年（七八一）十一歳までは、鄭州（河南省）において比較的平穏な幼少期を過ごしたようである。だが、翌建中三年には、各地で節度使の反乱が起り、家族と共に越（浙江省一帯）に避難。それ以後、長安で書判拔萃科に合格する三十一歳まで、足かけ二十一年間は、各地を転々とする流浪の生活を余儀なくされた。^①一家離散したこの時期の労苦を、例えば、貞元十四年（七九八）二十七歳の詩ではこう詠じている。

時難年飢世業空、弟兄羈旅各西東
田園寥落干戈後、骨肉流離道路中
弔影分為千里鴈、辭根散作九秋蓬
共看明月心垂淚、一夜鄉心五処同

〔自河南經亂、閩内阻飢、兄弟離散各在一処。因望月有感、聊書所懷、寄上浮梁大兄・於潛七兄・烏江十五兄、兼示符離及下邳弟妹（0691）〕

生まれ故郷の河南一帯は戦乱に見舞われ、食糧難もあつて兄弟は離散。浮梁（江西省饒州市）には長兄幼文がおり、

於潜（浙江省杭州市）には七兄、烏江（安徽省和县）には十五兄、符離（安徽省宿県）には六兄と弟妹、下邳（陝西省渭南市）には弟妹が暮らしていた。このうち筆頭にあげられた白幼文は、居易と父母を同じくする実兄である。

この詩を詠じた二十七歳（貞元十四年）の秋、居易は符離（徐州市の南）を離れ、饒州浮梁県の長兄幼文の元に居たと推定される。同年夏に詠じた「将之饒州、夜泊江浦」詩（0426）に、こゝう詠っているからである。詩中の「鄱陽」は浮梁をいう。

明月満深浦、愁人臥孤舟
煩冤寢不得、夏夜長於秋

苦乏衣食資、遠為江海游

光陰坐遲暮、鄉国行阻脩

身病向鄱陽、家貧寄徐州

翌貞元十五年（二十八歳）の春には、病臥する母を見舞うため洛陽に向かう。実兄幼文が薄給で手に入れた米を馬車に積み、浮梁を出発した居易は、その途次、山中の旅館で「傷遠行賦」（1410）を詠む。

貞元十五年の春、吾が兄浮梁に吏たり。微禄を分かちて以て帰養せんとし、予に命じて米を負ひて郷に還らしむ。郊野を出づるや予をして愁へしむ、夫れ何ぞ道路の茫茫たる。茫茫たり二千五百里、鄱陽自りして洛陽に帰る。……況んや太夫人（母）、疾を抱きて堂に在り。我

の行役せし自り、諒に夙夜にして憂傷するをや。惟れ母の子を念ふの心、心測る可けんや。量る可けんや。慈を割きて言はずと雖も、終に中腸に蘊結す。日に予が弟左右に侍り、固く就養して方無し。温清の闕けたる驛しと雖も、詎ぞ我の傍に在るに当たらんや……征車を駆りて帰路に遵ふと雖も、猶ほ自ら郷涙の流浪たるを流す。貞元十五年春、吾兄吏于浮梁。分微禄以帰養、命予負米而還郷。出郊野兮愁予、夫何道路之茫茫。茫茫兮二千五百里、自鄱陽而帰洛陽。……況太夫人（母）、抱疾在堂。自我行役、諒夙夜而憂傷。惟母念子之心、心可測而可量。雖割慈而不言、終蘊結乎中腸。曰予弟兮侍左右、固就養而無方。雖温清之驛闕、詎当我之在傍……則驅征車而遵歸路、猶自流郷涙之流浪。

この賦には、病氣の母を思う子の真情が溢れている。「予が弟（母の）左右に侍る」とあるのは、実弟行簡のことか。同年（貞元十五年）の秋、宣州（宣城、安徽省）に行き郷試に合格した居易は、宣歙觀察使崔衍に推挙され、長安で進士科を受験することとなった。洛陽を経て初めて長安に出てきた居易は、貞元十六年正月、元宵節でにぎわう都の様子を眺め、「長安正月十五日」（0678）を詠じた。

誼誼車馬帝王州、羈病無心逐勝遊
明月春風三五夜、万人行樂一人愁
行樂に沸き立つ首都の雰囲気になじめず、ひとり愁う居

易。旅の労苦に疲れ果てた身を「羈病」と表現しているが、この一語の背後には二十年近い漂泊の体験がある。

その後居易は、主任試験官（高郢）への推薦を依頼すべく、「雜文二十首・詩一百首」を添えて、給事中の陳京に手紙を献呈する。その「与陳給事書」（484）で、自身について言う。

居易は鄙人なり。上は朝廷に附離の援無く、次に郷曲に吹胸の誉も無し。然らば則ち孰か為めに来たらんや。蓋し仕る所の者は文章のみ、望む所の者は主司の至公のみ。

居易、鄙人也。上無朝廷附離之援、次無郷曲吹胸之誉。然則孰為而来哉。蓋所仗者文章耳、所望者主司至公耳。

「鄙人」とは、「家柄の低い田舎者」の意。居易の出自が低いことは事実であるが、それが「動かしがたい事実」であることを痛切に悟ったのは、この時であったかもしれない。華麗な首都の権勢と初めて対峙した時、地方出の若者は、深い孤独感とともに、自分が鄙人であることを痛切に自覚させられる。しかし逆に「頼れるものは自己の実力と試験官の公正のみ」と覚悟を定め行動してゆく姿には、逞しさが現れている。

二月十四日に及第すると、居易は合格を伝えるべく洛陽へ旅立つ。その送別の宴席で同期生にのこした詩が「及第後帰観、留別諸同年」（0210）である。

十年常苦学、一上謬成名

……

擢第未為貴、賀親方始楽

……

翩翩馬蹄疾、春日帰郷情

勇躍、母の待つ洛陽に帰った居易は、その後、実兄幼文の住む浮梁（江西省、鄱陽湖の東）へ南遊の旅に出た。その途次、「黟歙の間（安徽省の南部、黄山の一带）」で符離の六兄と出会い、再会を喜び合うが、これが六兄との最期の別れとなった（「祭符離六兄文」1446）。九月に居易は徐州（符離を訪れたが、その時には、旅先で倒れた六兄は、すでに故人となっていたのである）。

翌貞元十七年（八〇二）春、居易はなお符離に留まり、六兄の祭文を書く。その後宣城（安徽省）へ向かい、七月七日には「祭烏江十五兄文」（1449）を認めることとなった。居易が宣城に来たのは、二年前の郷試で座主を務め自分を推薦してくれた崔衍に進士科合格を伝え、感謝を述べるためであった（「叙徳書情四十韻、上宣歙崔中丞」0612）。その後は再び洛陽に帰つたらしい。なぜなら鄭元の詩に唱和した「和鄭元及第後、秋帰洛下閑居」（0609）詩の自注に「同じく高侍郎の下に、年を隔てて及第す（同高侍郎下、隔年及第）」とあり、貞元十七年の作であることがわかるからである。居易から一年遅れて進士科に合格した鄭元は、貞元十七年秋には洛陽に

帰省し、閑居を楽しむ詩を書いた。それに唱和する詩を詠んでいるのであるから、この時には居易もやはり洛陽に居たと推定される。

その後の動向は不明だが、おそらく母や弟行簡の居る洛陽で、しばらく身心の疲れを癒やしたのではないか。遅くとも貞元十八年（八〇二）の秋には、長安に戻っていた。同年秋の詩「秋雨中、贈元九」（0620）に「怪しむ莫れ 独吟 秋思の苦しきを、君に比べて校近し、二毛の年（莫怪独吟秋思苦、比君校近、二毛年）」とあるからである。「二毛の年」は三十二歳。したがって詩はその前年、貞元十八年秋の作と推定される。長安に戻った居易は、冬十一月の書判拔萃科受験に備え、「判五十道」（2093、2192、3796、3811、3812）等の習作を、精力的に作成したのである。

二 山の詩①——漂泊期

ではこの時期（生誕から貞元十八年冬の拔萃科受験までの漂泊期）に、居易はどのように山を詠じたか。

貞元十六年正月、進士科受験のため初めて長安に出てきた際の七律「長安早春旅懷」（0692）にいう。

軒車歌吹喧都邑、中有一人向隅立

夜深明月卷簾愁、日暮青山望郷泣

夕暮れに眺めて望郷の涙を流した「青山」とは、長安の東

方、母のいる洛陽方面の山並みであったに違いない。

同年二月、進士科に合格すると、喜びの一方で「及第後懷旧山」（0701）を作っている。

偶献子虚登上第、却吟招隱憶中林

春蘿秋桂莫惆悵、縦有浮名不繫心

「自分は偶々賦を献じて試験に合格したが、いまは却って、『楚辞』の詩「招隱士」を吟じ、山中に隠棲したく思っている」と言う。後半の「春蘿、秋桂」は、かつて親しんだ故郷の山に茂る草木を擬人化し、呼びかけたもの。「旧山」の春蘿秋桂よ、嘆く必要はない。うわべの名声を得ても、それに心が繋がれることはない。（いずれまたお前たちの元に帰ってゆくのだから）と、呼びかけているのである。類似の表現は、三年後、貞元十九年（八〇三）の「晩秋、有懷鄭中旧隱」（0713）にも、「長間 雲鶴を羨み、久別 煙蘿に愧づ、（長間 羨雲鶴、久別愧煙蘿）」とある。先の詩で居易が「いずれ帰る」と約束した「旧山（の春蘿秋桂）」とは、生まれ故郷・鄭州（新鄭・滎陽）の山を指すと見てよいであろう。

進士科及第を果たした居易は、先ず洛陽の母の元に向かい、その後、浮梁の長兄や符離の六兄らに会うべく、南遊の旅に出た。その旅の途次、貞元十六年の春から夏の時期に、次掲した「歙州山行、懷故山」（3760、補遺作品）を詠んでいる。「歙州」は、安徽省南部、黄山付近の地であり、浮梁に程近いことから、長兄幼文の元を訪れた際の作品であろう。

悔別故山遠、愁行歸路遲

雲峰雜滿眼、不当隱淪時

この時、黄山一帯の山岳地帯を旅していた居易は、山景に触発されて「故山」（故郷鄭州の山々）を懐かしく思い出し、山に隠棲したいとの思いにとらわれる。しかし、進士科に合格したばかりの今は「隱淪（隱遁）の時ではない」と、思い返しているのである。

隱棲山居の実現は、白居易の人生設計に関わる重要な願望であった。時期は特定できないが、貞元十六年以前の作とされる「秋暮郊居書懷」（0685）に、早くも以下のように詠っている。

郊居人事少、昼臥対林巒

若問生涯計、前溪一釣竿

一方、冒頭で確認した通り、居易には「本性 山寺を便とする（自分は山寺に居ると心安らく人間である）」との自覚があった。それを示唆する詩がこの時期に現れている。

不与人境接、寺門開向山

暮鐘鳴鳥聚、秋雨病僧閑

月隱雲樹外、螢飛廊宇間

幸投花界宿、暫得靜心顏

この「旅次景空寺、宿幽上人院」詩（0675）は、通説（花房・朱金城両氏の説）では貞元十六年の作とされる。だとすれば、進士科及第後の秋、南遊の旅の途上で寺院に宿泊した

際の作品である。景空寺は、詩の表現から推して、山中もしくは山下にあった寺院。この閑寂な僧院に泊まった居易は、旅の疲れをしばし安んじ得たが、それは花界（蓮花界、仏教世界）に宿をとれたことが大きかった。仏教的な悟りによって心の平静を得たいと早くから願っていた居易にとつて、寺院は心安やく場所であった。

そうした悟りの境地、平静な心への願望は、この時期に上人へ寄贈した詩にも、繰り返し詠われている。①「空門此を去ること幾多地ぞ、残花を把りて上人に問はんと欲す（空門此去幾多地、欲把残花問上人）」（感芍薬花、寄正上人）0683（貞元十六年）、②「誤りて聞見の中に落ち、憂喜形神を傷ましむ。安んぞ得ん耳目を遺れて、冥然として天真に反らんことを（誤落聞見中、憂喜傷形神。安得遺耳目、冥然反天真）」（題贈定観上人）0434（貞元十六年）、③「借問空門の子、何の法か修行し易く、我をして心を忘れ得しめ、煩惱をして生ぜしめざる（借問空門子、何法易修行、使我忘得心、不教煩惱生）」（客路感秋、寄明準上人）0429（貞元十六年）。煩惱に満ちた俗世と閑寂平静な仏寺世界との対比は、次掲した「乱後過流溝寺」（0656）詩にも顕著である。

流溝寺は、徐州符離の流溝山にあった山寺。貞元十六年の晩秋、居易は六兄に会うため符離を訪れ、その際、流溝寺にも立ち寄った。詩題に「乱後」とあるのは、この年、貞元十六年五月に徐泗濠節度使の張建封が卒し、後継者をめぐつ

て徐州の軍が乱れたことをいう。この時、節度軍の反乱を諫めた行軍司馬韋夏卿の義挙とその死については、柳宗元の五言古詩「韋道安」に詳しい（『柳宗元集校注』巻四十二）。同年九月、建封の息子愷が後継となることを徳宗が認め、戦乱はようやく収まった。居易はその直後に徐州の寺を訪れ、こう詠じている。

九月徐州新戦後、悲風殺氣滿山河

唯有流溝山下寺、門前依旧白雲多

戦乱後の悲風と殺気に満ちた徐州一带にあつて、山中の流溝寺だけは、以前と変わらず、白雲（俗世を離れた森閑たる静寂）に包まれている、というのである。ここには俗塵を離れた山中の寺院を好ましく思う居易の志向が、象徴的に表現されている。末尾の「白雲多し」は、梁の陶弘景（四五六～五三六）の詩に由来する表現。陶弘景は江蘇省の茅山に隠棲して道教や本草学（漢方）の研究をしていた時、斉の高祖から「山中に何の有る所ぞ」と問われ、次の詩を詠んだ。

山中何所有、嶺上多白雲、

只可自怡悦、不堪持寄君

「嶺の上には白雲がたくさんあります。」——「白雲」は、隠者の楽しみの象徴なのである。

三 伝記考②——32歳～34歳

貞元十九年（八〇三）春、書判拔粹科に及第すると、居易は長安に仮住まいを求め、常楽里の故宰相閔播の私邸東亭を一時的な居場所とした。翌日、その亭の東南隅に叢竹を見つけ、今では見捨てられたその叢竹が、むかし閔相国が手ずから植えたものと聞く。一日足らずで手入れを終えると、叢竹は「依依然、欣欣然」として喜び、感激しているようであった。「養竹記」（147）はそう記した後、こう結ばれている。

嗚呼、竹は自ら異にする能はず、惟だ人のみ之を異にす。賢も自ら異にする能はず、惟だ賢を用ひる者のみ之を異にす。故に「養竹記」を作り、亭の壁に書して、以て其の後の斯に居る者に貽り、亦た以て今の賢を用ひる者に聞せんと欲すと云ふ。

嗚呼、竹不能自異、惟人異之。賢不能自異、惟用賢者異之。故作「養竹記」、書于亭之壁、以貽其後之居斯者、亦欲以聞於今之用賢者云。

この末尾は、韓愈が「雜説」（其の四）で「世に伯樂有りて、然る後に千里の馬有り（世有伯樂、然後有千里馬）」と論じたことを彷彿させる。

実は、同じ貞元十九年春の作として居易に「送文暢上人東遊」詩（0653）があり、韓愈にも「送浮屠文暢師序」（『韓昌黎文集』巻四）がある。さらに柳宗元にも「送文暢上人登五

台遂遊河朔序」(中華書局『柳宗元集校注』卷二十五・貞元十七年の作)が遺されているのである。⁸⁾

韓愈の序文に、

浮屠師文暢文章を喜び、其の天下を周遊するや、凡て行く有れば、必ず摺紳先生に請ひて以て其の志す所を詠誦せんことを求む。貞元十九年春、將に東南に行かんとし、柳君宗元之が、為めに請ふ。

浮屠師文暢喜文章、其周遊天下、凡有行、必請摺紳先生以詠誦其所志。貞元十九年春、將行東南、柳君宗元、為之請。

と述べているように、文を好んだ文暢上人は、この年の春、柳宗元、韓愈、白居易の元を続けて訪れ、文章を請うていた。この時、韓愈は四門博士として学生に「古への道」を熱心に説いていたが、例えば、この文暢上人などを介して、居易が韓愈の所説を聞き知ったとしても不思議ではない。また心情においても、居易は韓愈や柳宗元ら同輩の動向に強い関心を寄せていたはずであり、さらに抜擢への熱願は、彼ら青年知識人共有の願望であった。

仮住まいの叢竹を整え「養竹記」を書いた居易は、「常楽里閑居……」の詩を認め、さっそく仲間を呼び寄せることにした。

帝都名利場、鷓鴣無安居

独有嬾漫者、日高頭未梳

……

茅屋四五間、一馬二僕夫
俸錢万六千、月給亦有余

既無衣食牽、亦少人事拘

遂使少年心、日日常晏如

勿言無已知、噪靜各有徒

蘭台七八人、出処与之俱

……

誰能讎校間、解帶臥吾廬

窓前有竹甃、門外有酒沽

何以待君子、數竿對一壺

「常楽里閑居、偶題十六韻。兼寄劉十五公輿・王十一起・呂二吳・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方」(0175)。

閑適詩の冒頭を飾るこの詩は、後半で、手入れを済ませたばかりの叢竹の心地よさを強調する。「養竹記」では「賢者や君子の庭にふさわしい植物」であった竹は、この詩では「隠者の閑居にふさわしい植物」として登場する。居易が陶淵明にならって「吾が廬」と呼ぶ常楽里の閑居は、「名利の場」たる帝都長安から独立した「安閑自足の場」であり、「自己」の理想や嗜好を体現する自適の場であった。それを詩に詠ずることによって、居易はそこを、帝都長安が体現する価値観(名利の闘争)に対する「アンチテーゼの世界」と

して定立した。逆に言えば、この詩では「安閑自足の境地」が実際以上に強調されている。事実、「俸錢万六千、月々給りて亦た余り有り」と述べ、俸禄に満足しているかのようであるが、同年初秋に詠まれた詩「思帰」(0427)では、校書郎の俸禄の少なさが次のように嘆かれている。

養無晨昏膳、隱無伏臘資

遂求及親禄、僮俛來京師

薄俸未及家、散秩已經時

冬積温席恋、春違採蘭期

夏至一陰生、稍稍夕漏遲

塊然抱愁者、夜長独先知

悠悠鄉閨路、夢去身不隨

坐惜時節變、蟬鳴槐花枝

詩の半ばに「冬は温席の恋を積み、春は採蘭の期に違ふ」とあるのは、母への孝養を尽くせないことを嘆く言葉。「薄俸未だ家に及ばず」と言うように、校書郎の俸給では家族を養うのは難しかった。そうした経済的な理由からであろう、この時すでに居易は常楽里の閑居を離れ、永崇里の華陽観へ転居していたようだ。「重到華陽観旧居」詩(0839)に、こう詠じている。

憶昔初年三十二、當時秋思已難堪

若為重入華陽院、病鬢愁心四十三

この詩は元和九年の秋、下邳での服喪を終えて、藍田の悟

真寺に遊んだ居易が、新居に移るまでの一時期、華陽観に宿泊していた際の作品であろう。この詩によって、三十二歳(貞元十九年)の秋、居易が華陽観において「堪え難い秋思」にとらわれていたことがわかる。それは、先の詩で見た通り「母への思いを中心とする憂慮」であったに違いない。

翌貞元二十年(八〇四)二月、居易は母の待つ洛陽へ帰省し、「八漸偈并序」(143)を書く。八漸とは、悟りに到るまでの八段階の漸悟をいう。この「八漸の偈」は仏教思想について居易が初めて本格的に言及した作品である。

その後、彼はふたたび徐州へ南遊の旅に出た。符離の六兄の墓を下邳の新墓に移し、その妻子を引き取るためと推測される。到着した徐州では節度使の宴席に呼ばれ、歓待を受けた。「燕子樓三首」の序文(0859)にいう。

徐州の故張尚書に愛妓有り、眇眇と曰ふ。歌舞を善く

し、雅より風態多し。予校書郎為りし時、徐泗の間に遊

ぶ。張尚書予を宴し、酒酣なるとき、眇眇を出し以て

歡を佐けしむ。歡ぶこと甚し。予因つて詩を贈りて云ふ

「醉嬌勝へ得ず、風は嬋す牡丹の花」と。歡を尽くして

去る。

徐州故張尚書有愛妓、曰眇眇。善歌舞、雅多風態。予為

校書郎時、遊徐泗間。張尚書宴予、酒酣、出眇眇以佐

歡。歡甚。予因贈詩云「醉嬌勝不得、風嬋牡丹花」。尽

歡而去。

「徐州の故張尚書」とは、四年前（貞元十六年）の兵乱により、父の後継者たることを朝廷から認められた徐泗濠節度使張愔のこと。戦乱の直後に居易が徐州符離の流溝寺を訪れ詩を詠じたことは、先にふれた通りである。四年後の今回は、徐州の政情も落ち着き、拔粹科に合格して居易の声望も高まっていた。それで張愔は宴席に彼を呼び、居易もまた快く招きに応じたのであろう。

その後洛陽へ帰り、下邳を経て、翌貞元二十一年（八〇五）春には長安の華陽觀に戻った。「春中与盧四周諒華陽觀同居」

(0633)にいう。

性情懶慢好相親、門巷蕭条称作鄰

背燭共憐深夜月、蹋花同惜少年春

杏壇住僻雖宜病、芸閣官微不救貧

文行如君尚憔悴、不知霄漢待何人

この詩が詠まれた貞元二十一年の春は、正月二十三日に徳宗が崩御。新帝順宗が即位して、大きな変革を予感させる時期であった（八月以降は、順宗の永貞元年）。末尾の句「知らず霄漢（朝廷）何人をか待つ」には、拔擢を期待する気持ちが届められていよう。「芸閣（校書郎）官微にして貧を救はず」とあるように、やはり校書郎の俸給は、母や一族を養うには十分でなかった。そこで居易は果敢な行動に出る。二月十一日に宰相を拝したばかりの韋執誼に宛てて、八日後の十九日、上書を試みたのである。「為人上宰相書」（1485）がそ

れである。「数千言」に及ぶこの手紙の末尾は、こう結ばれている。

抑おさも又聞く、死馬の骨を棄てざる者にして、然る後良

驥ぞも（名馬）を得べきなり。狂夫の言を棄てざる者にし

て、然る後嘉謨かほ（立派な方策）聞くべきなり。苟くも

某それの管見の中に取るべき者有らば、俯して之を取れ。

……則ち之を知る者必ず曰はん、某（居易）の見の如

きも、猶ほ且つ棄てず、況んや某より愈まされるの徒をや、

と。則ち天下精通達識之士、肩を比なべて至らざるを得ん

か。……今一旦卒然として数千言（の手紙を）以て執事

を塵じん黷とくする者……又以て天下顛頤てんぎの人の死命（棄てられ

た命運）の万分の一分を濟はんと欲すればなり。相公

（宰相）以為らく如何と。

抑又聞、不棄死馬之骨者、然後良驥可得也。不棄狂夫之

言者、然後嘉謨可聞也。苟某管見之中有可取者、俯而取

之。……則知之者必曰、如某之見、猶且不棄、況愈於某

之徒歟。則天下精通達識之士、得不比肩而至乎。……今

一旦卒然以数千言塵黷執事者……又欲以濟天下顛頤之人

死命万分之一分也。相公以為如何。

この末尾には、いわゆる「隗より始めよ」の論法によって、この手紙が「人の為め」でもある理由が説明されている。「人」とは、「精通達識」でありながら微官に埋もれている「顛頤の人」。例えば先の詩（「春中与盧四周諒華陽觀同

居」で、「文行君の如くにして尚ほ憔悴す」と同情を寄せていた盧周諒の如き人物をいう。無論その筆頭は居易自身なのであって、居易はこの上書により、新宰相韋執誼が自分を新政権に抜擢してくれることを期待したのである。しかしその期待は裏切られた。夏が過ぎ、秋を迎えても、韋執誼から声が掛かることはなかった。①「官小にして職事無く、客と為る時よりも閑なり。……長安は名利の地、此の興、幾人か知る（官小無職事、閑於為客時……長安名利地、此興幾人知）」〔首夏同諸校正遊開元觀、因宿翫月〕（0178）、②「永崇里巷靜かに、華陽觀院幽なり。……身は世界に住むと雖も、心は虚無と遊ぶ。……幸ひに凍と餒とを免る、此の外復た何を求めん（永崇里巷靜、華陽觀院幽……身雖住世界、心与虚無遊……幸免凍与餒、此外復何求）」〔永崇里觀居〕（0179）。こう自らを慰めるほかなかったのである。しかし、韋執誼から声が掛からなかったことは、居易にとって大きな幸運であった。

四 山の詩②—歸山の詩

先に見たように、貞元十六年二月、進士科に合格した居易は、「及第後懷旧山」（070）詩で「春蘿秋桂 惆悵する莫れ、縦ひ浮名有るも 心を繋かず」と詠じていた。貞元十九年春、拔萃科及第後の作「秘書省中憶旧山」（0667）でも、次のよう

に詠じている。

厭從薄宦校青簡、悔別故山思白雲、
猶喜蘭台非傲吏、歸時応免動移文

故郷の山に別れ、都で微官となった現状を厭うこの詩は、秘書省内で詠まれた作品である。そこは権力の中樞（高官の居所）でこそないが、宮中の一角。「名利の地」長安の中心部に含まれる。本来「山中の人」を自認する居易にとって、自己の本性に適さない、居心地の悪い場所であった。その不適合感が、おのずから「故山に別れたことへの後悔」へと繋がってゆく。居易がそうしたストレスから開放され、本来の自己を取り戻せる場所、それが、常楽里の閑居であった。そうした心理構造から、常楽里の閑居を「山中」と見なす詩が生まれてくる。

風竹松煙昼掩闕、意中長似在深山、
無人不怪長安住、何独朝朝暮暮閑

〔長安閑居〕（0665）

しかし、その「深山に在るがごとく（常楽里の）閑居」に長く住み続けることはできなかった。経済的な理由から、華陽觀に転居した居易は、翌貞元二十一年二月十九日、「為人上宰相書」を献じて、新宰相の韋執誼に抜擢を願ひ出たのである。

だが、その直後の三月早朝、試験場に向かう挙人（進士科受験者）の隊列を目撃した居易は、「早送挙人入試」（0180）を

詠じ、末尾で次のように述べている。

嘗營各何求、無非利与名

而我常晏起、虚住長安城

春深官又滿、日有歸山情

五年前、貞元十六年の二月には、居易自身が、その隊列中の一人であった。当年の正月、進士科受験のため初めて長安に出てきた居易は、こう詠じていた。

軒車歌吹喧都邑、中有一人向隅立

夜深明月卷簾愁、日暮青山望鄉泣

〔長安早春旅懷〕(0629)

この両詩を併せ読めば、貞元二十一年三月早朝、受験会場に向かう挙人の隊列を見た居易の心理が、分裂を孕んだ複雑なものであったことがわかる。即ち、先の詩で受験の目的を「利と名」とに非ざるは無し」と批判的に述べた背後には、「自分(の目的)は彼らとは違う」という、矜持や意欲が隠されていよう。しかし一方で、「名利の闘争」を象徴する帝都長安に暮らしている疎外感(不適合感)が、居易に「帰山の情」を抱かせる。前者の矜持や意欲は、彼を新宰相への上书という大胆な行為に及ばせた原動力であり、後者の疎外感とは、本性に適した場所への回帰(帰山・帰郷)を促す。権勢の中心への接近と、そこからの離脱——そうした逆方向に分裂しかねない心を、校書郎当時の白居易は抱えていた。

そのような折に起こったのが、韋執誼の崖州司馬左遷とい

う事件であった。病気の順宗に代わり八月に新帝憲宗が即位すると、先の政權で実權を握っていた王叔文や王伾、その一党と目された柳宗元・劉禹錫ら八司馬が次々に左遷され、十一月には、連座して韋執誼も崖州(海南島)に左遷された。次掲した「寄隱者」(0058)は、その事件を受けて詠まれた詩である。

堯堯向都城、行憩青門樹

道逢馳馭者、色有非常懼

……

云是右丞相、当国握樞務

祿厚食万錢、恩深日三顧

昨日延英对、今日崖州去

由来君臣間、寵辱在朝暮

青青東郊草、中有歸山路

歸去臥雲人、謀身計非誤

薬売りが長安にやってくると、右丞相(韋執誼)の左遷に慌てふためく者と道で出会う。事情を聞いた薬売りは、臥雲の人(隱者)にこう呼びかけるのである、「山に帰るがよい、君の処世の計は間違っていない」と。

同じ事件に取材した詩に「寓意詩五首」(其の二)(0091)がある。

赫赫京内史、炎炎中書郎

昨伝徵拜日、恩賜頗殊常

……
佩服身未暖、已聞竄遐荒
親戚不得別、吞声泣路旁
……

權勢去尤速、警若石火光
不如守貧賤、貧賤可久長
伝語宦遊子、且来帰故郷

中書侍郎同平章事（宰相）であつた韋執誼の左遷を受け、居易は「宦遊の子」（故郷を離れ官僚となつた若者）に向けて、「故郷に帰れ」と呼びかけている。

この二首が白居易の自問自答であり、登場する「臥雲の人（隱者）」や「宦遊の子」が、居易自身の「分身」であることは明らかだろう。

校書郎になつても、居易の心中では「故山（故郷の山）」に帰りたいとの念願が、通奏低音のごとく響き続けていた。その胸中の思いが、「隱者に寄す」詩では「帰山の促し」となり、「寓意詩」「其の二」では「帰郷の呼びかけ」となつて、現れたのである。

しかし一方で、「寓意詩」「其の一」(0090)では、「有能な人材が拔擢されない」ことを悲しんでいる。深山に生えた大木が、その良材を見出されることなく山火事で無に帰したことを、「焚焼の苦を悲しまず、但だ（良材）採用の遲きを悲しむのみ（不悲焚焼苦、但悲采用遲）」と嘆いているのである。

これは「人の為に宰相に上る書」と同趣旨の主張であろう。要するに、校書郎であつた当時、白居易の内心には「帰山」と「拔擢」という、相反する二つの願望が併存していたのである。

五 小 結

本稿では、居易の生涯から三十四歳までを対象として、重要な事跡を確認し、さらに当該時期の詩文から、山（寺）との関わりを考察した。その結果、校書郎期の白居易が「帰山」と「拔擢」という、相反する二つの願望を同時に抱いていたことが浮き彫りとなつた。

この二筋の道は、果たして平行しているか。さもなくば、彼を逆方向へと導く、分裂の危険を孕んだ道であろう。だが、当時の居易には、「帰山の道」は事実上閉ざされており、彼は「拔擢への道」を進むほかなかつた。だとすれば、「帰山の願望」は、おのずから心底に押さえ込まれ、鬱積するほかはない。しかし「帰山」は、彼の本性に関わる願望なのである。その存在を無視し、抑圧することは、「自己を欺く」ことになる。

そうした内面性における分裂の危険を抱えながら、居易は官途を歩み始めた。その二筋の道は、彼をどのような状況へ導くのか。稿を改めて考察したい。

注

(1) 本文は岡村繁『白氏文集 一〜十二下』(新釈漢文大系・第97〜119巻、明治書院)に拠ったが、漢字は新字体に改めた。作品には花房英樹『白氏文集の批判的研究』(葉文堂書店、一九六〇年)による作品番号を付した。

(2) 詩では「五年侍臣と為る」というが、実質は足かけ四年であり、「五」は概数である。かりに「五年」を実数と見れば、この詩は元和六年、四十歳の作となる。

また、「肖像画(写真画)」の制作時期についても、主に元和三年(八〇八)説と元和五年(八一〇)説の二つがある。説が分かれる原因は、会昌二年(八四二)作の「香山居士写真詩並びに序」(352)に「元和五年、予為左拾遺、翰林学士、奉詔写真於集賢殿御書院。時年三十七」と述べており、冒頭の「元和五年」と末尾の「時に年三十七」とが合致しないからである。かりに「肖像画」の制作が「元和五年」であれば、白居易の年齢は「三十九」でなければならず、他方、末尾の「時に年三十七」を信ずれば、冒頭は「元和三年」でないと齟齬を生ずる。

この点について、新釈漢文大系『白氏文集 十二上』の語釈では「三年、宋本・那波本・馬本・汪本等いずれも『五年』に作る。恐らく形似の誤写。今、改める。」という。

白居易が左拾遺と翰林学士とを併せて任せられたのは、元和三年四月二十八日であるから、その際に「集賢殿の御書院」所属の宮廷画家李放(「真を写」した(肖像画を描いた)可能性は高い。だが、その「写真(原本の複写画か)」に、居易が詩を題したのは、後日(元和五年)であつてもよいわけである。なお、居易の写真詩については、澤崎久和『白居易研究』(研文出版・二〇一三年)第二章に詳細な論考がある。

(3) 李放は、唐・朱景玄撰『唐朝名画録』能品中の二十八人中に「又李仲昌・李傲、孟仲暉皆写真真得其妙。」とある。「李傲」のこととされる。前掲注(2)の澤崎氏著二〇八頁、及び朱金城箋校『白居易集箋校』

(上海古籍出版社、一九八八年)の【箋】を参照。

(4) 元和七年の作とされる場合が多いが、羅聯添『白樂天年譜』(國立編譯館・一九八九年)の繫年に従う。

(5) この時期における住居の移動については、埴田重夫氏が、従来の説を以下のように整理されている(『白居易研究——閑適の詩想』汲古書院、二〇〇六年、二一七頁)。

〔漂泊期〕(大暦七年(一歳)から貞元十七年(三十歳)まで) 新鄭・滎陽↓符離(埇橋)↓江南(蘇杭)↓越中(浙江)↓符離↓襄陽↓符離(丁父憂)↓浮梁↓洛陽↓宣城(郷試及第)↓洛陽)↓長安(進士科及第)↓洛陽↓浮梁↓符離)↓宣城↓洛陽)……

この内(↓洛陽)については、詩文による確認はできないが、羅聯添の年譜に「其時、樂天的家已自徐州搬到洛陽、所以宣城取解之後就回到洛陽省親」とあるのに拠る。肉親との離別を悲しむ「生離別」(0579)「黃河水白黃雲秋、行人河辺相對愁……末年三十生白髮」を詠んだのはこの時(貞元十五年、二十八歳秋)か。〔↓宣城↓洛陽〕は、諸田による補足。

(6) 実弟には行簡と幼美がいるが、幼美は貞元八年(七九二)に九歳で夭逝した。

(7) 『旧唐書』卷百四十・張愔伝に「愔以蔭授虢州參軍。初、建封卒、判官鄭通誠權知留後事、通誠懼軍士謀亂、適遇浙西兵還鎮、通誠欲引入州城為留後。事洩、三軍怒、五六千人斫甲仗庫取戈甲、執帶環繞衙城、請愔為援、乃殺通誠、……等。軍衆請於朝廷、乞授愔旆節、初不之許、……加杜佑同平章事以討徐州。既而泗州刺史張伋以兵攻埇橋、与徐軍接戰、伋大敗而還。朝廷不獲已、乃授愔……徐州刺史、……知徐州留後。……元和元年、……而愔赴京師、未出界卒。愔在徐州七年、百姓称理、詔贈右僕射」とある。

このうち「泗州刺史張伋兵を以て埇橋を攻む」とある「埇橋」は、六兄の家があつた場所。白居易は南遊の旅の際、符離の六兄と「黻歛の間(安徽省南部)」で出会つたというが、六兄(とその妻子)は、おそらく

徐州から避難してきていたのであろう。

- (8) 韓愈・柳宗元の序文の繫年については、当該「柳序」底本の尹占華・韓文奇氏【解題】を参照。白居易の「詩」は、通説では元和二年の作とされるが、呂温・権徳輿にも同題の詩があり、権徳輿は貞元十八年から三年間「知礼部貢举」（科挙試の長官）を務め、その当時、呂温は柳宗元や劉禹錫から文彩を高く評価されていた（『旧唐書』卷一三七・呂温伝）。文暢が人脈を頼りに文を求めたとすれば、貞元十九年が最も好条件であり、蓋然性が高い。よって通説の繫年を改める。

- (9) 但し、例えば貞元十六年以前の漂泊期に旅先で書かれた「秋暮西歸、途中書情」(431) 詩には「馬瘦衣囊破、別家來二年。憶婦復愁婦、婦無一囊錢。心雖非蘭膏、安得不自煎」とある。こうした状況と比較すれば、校書郎の月給に満足する気持ちも偽りではない。

- (10) 張愔の亡父張建封は、貞元十五年二月末に、汴州の乱により徐州へ避難してきた韓愈とその妻子を救済した節度使であり、また『旧唐書』でも「建封在彭城十年、軍州称理。復又礼賢下士、無賢不肖、遊其門者、皆礼遇之、天下名士嚮風延頸、其往如婦。」(卷一四〇・張建封伝)と、その人格を称えられている。子の張愔についても前掲注(7)の伝に「愔在徐州七年、百姓称理」とあり、父を継いで徐州をよく治めたようである。

- (11) この年は、正月に徳宗が崩御し国葬があつたため、通常であれば正月に実施される礼部試が三月に行われた。